

富山大学の多様性を発信

とみダイバー

工学系教授 田端 俊英先生

男女がともに創る社会
気負わず、肩肘はらず
「好き」の先に高みがある

男女比を正し、ユーザーに優しいサービスを

田端先生は日頃「工学には女性が必要」と言っておられますよね。その理由とは。

これからの工業は、他のあらゆるサービスもそうなんですけども、ユーザードリブンじゃないといけない。ユーザーの思いを反映し、ユーザーが求めているものを作んなきゃいけない。ところが現在の一般的な工業というのは、先輩の社員がやってきたことを改良する、っていう方法がほとんどなんです。そうすると、ユーザーから離れてしまう場合があるんですよ。ただひたすら性能を追求するっていうことになってしまって。その結果、ユーザー側からすれば、そんな性能いらないよ、もっと利便性を求めているって場合が出てきて、結局ユーザーが離れていってしまう例があつて。

工業は男性社会って感じなんですけども、男目線しかユーザーを観察しない、男目線しかどんなサービスを作るか、製品を作るかを発想しない。最近でこそ女性のデザイナーを入れて、女性はこんなのが好きだからってこともよくやられるんですけど、まあだいたい男性社員が、女性は多分こんなもんが好きだろうと、ピンクにしようときゃいいだろ、とか（笑）そういう発想のものが未だにあるんですよ。社会って男女ほとんど5：5の人口でいるわけで、なのにモノを開発して提供する人は**男ばかり**ということが、まず歪みというかおかしいんですよ。

さらに、日本の公的な機関が、女子は理数系の科目が不得意かということ、そんなことはないってもう証明しているわけなんだよね。うちの大学も、文系とか生物系のところには女性が結構いて、5：5に迫るような勢いがあると。でも**理系的な、機械的な、電氣的なところには女性は向かない、っていう刷り込みが、男子にもあるし女子にもあるんですよ。それを打破していくことで、この社会の男女比を反映した形、つまりユーザーに優しいものづくりが進むようになる**ので、「あ、こういうものを求めていたんだ。」っていうものが出てくるっていうことになるんですよ。

男尊女卑って…古くない？

女性の目線が必須である中、
女性比率が小さいのはなぜでしょうか。

私は大阪大学の出身でしかも最初は文学部だったんですね。哲学者を目指していて。女性が多くて、それが普通だと思っていたんです。大学院から脳の研究をやりたくなって医学部の大学院に移ったんです。で、今工学部なんですけど（笑）文学部、医学部、工学部と変わっていく中でだんだん女性の比率が減っていったんですね。工学では女性はよく言って一割強もしくはそれを下回る状況で、どう考えても世間の男女の割合と違うんですよね。でも欧米に至っては女子の方が多いことも結構多いんですよ。カナダとかも6：4とかになる所があるんですよ。

じゃあ、いったいなんで日本の一部のコースでは未だに1割なんだ、っていうことで。その答えとなるヒントを探すために、本学の頑張ってる女子学生にインタビューしまくったんです。そしたら面白いことに、工学部の中でもすごくやる気のある子たちが、学生ロボットコンテストのプロジェクトに参加していて。しかもリーダーが今、三代続けて女性なんです。一時、四割が女性っていう時もあったって、かなり女性の比率が高いと。それでそこにインタビューに行って、どういう動機でここを選んだのか、今どういう気持ちでいるのか聞いてみたわけなんですけど、そこで結構ショックなことがあったんです。それぞれの女子学生が異口同音に「女だてらに私は頑張ってるんだ。」って語っていて。

それはどういうことかということ、例えば高校の国立理系進学クラスなんかには、女性は私一人しかいませんでした、と。その中で頑張ってきたんだ、っていうような思い。だからこそものづくりで極めたいから、授業だけでは飽き足らずロボコンに行くっていう学生がたくさんいることが分かってきたんです。

ショッキングでしたね。「え？男尊女卑を打破するとかそういう思いって、なんか時代錯誤というか古臭くない？」って思って。そういう時代はもう終わってないか？って思ってびっくりしてしまっただけ。

でも、うちにいた研究室の子もやっぱり、国立理系を目指すクラスで、一人しかいなくて、そこでそれなりに頑張ってたってということで、特別な思いがあってやってるって言ってて。じゃあ世間的にそうなのかなと思い、私は大阪大でしたしいろんな大学も回ってきて、旧帝大とかで研究者になったような友達がいっぱいいるんで、そういう方にも聞いたんですよ。そしたら「はあ？」って言われて。「**性別なんか意識したこと一回も無いよ**」と。ただただ生物が好きだったから、理学が好きだったから、なんとなかが好きだったから、そういう学校に入っただけで、確かに男性がちょっと多かったかもしれないけど、何も感じたことが無い。っていう。

「男尊女卑を打破するぞ！」とか「我こそは！」とかいう思いで来るのと、「まあ男性ちょっと多いけどだんだん増えてくるでしょ、ただ私は工学が好きだから」ってやってる子と、大分開きがあるなあ、ていうショックを受けたんですよ。その時にハッと思い出したんですけど、就職指導の担当が何年かにいっぺん回ってくるんですね。するとたまに女子学生が質問に来るんですが、「修士課程に行け行けって先生方はおっしゃいますけど、そこに女の幸せはあるんですか？」って3人くらいに言われたことがあるんですよ。昭和30年代みたいな、しかもその昭和30年代の壮年世代が言っていたようなことを言うんで、びっくりしてしまって。「**男女とかそういうこと関係なく、エンジニアとしてより高度なことをやるために修士が良いよってだけですよ。**」っていう。



また、そういうことを発言するのは地方の子の方が多いんですよ。そこにやっぱ問題があるのかなというのを意識してたら、ある時、自分の思ったことをはっきり言ってしまうような男の子が地方からやってきたんですけど、いろんな話をする中で、地方はやっぱ中小企業が多いと。さらに中小企業はやはり経営が苦しいと。だから、女性の能力のある人を雇っても良いけど、子供を育てるために育休を取るだろう、もちろん男性だって今法律があって取れるわけですけど、女子がやっぱ取るだろうと。そしたらその間その人が最前線を外れて、それを補うのが難しいから、だから中小企業をはじめとして、女性をなかなか採用しないのはある程度合理性がある、という発言をしたんですよ。僕はちょっと、怒りまして。3時間くらい説教して。「そういう考え方の人がいるから変わらないんだ」ということを言ったんですよ。でも女子学生も、特に地方出身の女子は、それはある程度致し方ないことだと思っている、ということが分かってきたんですよ。「それは不当であって変えていかなきゃいけないんだ」になってないんですね。

そもそも、そのような歪みが生まれた原因はなんなのでしょう。

男尊女卑とか、女性と言えど文系でしょと思っている人は、やっぱ親がそういう考えっていうのが反映してる可能性があって。逆に偏見が無い家庭、例えば今、紫式部がもてはやされてるけども、あの方は漢詩が得意で、お父さんが漢文学者で、娘が弟よりも出来たので「残念」と言われつつもそのまま突っ走って文学者になるわけですよ。そんな感じで、漢字を操るなんてのは男のことだっていう時代に、お父さんが我が娘をどんどん教育したわけですよ。紫式部って現代に生きてたら、リケジョだったと思うんですよ。当時の科学が漢学だったんで。父親が「そういうのもいいんじゃない」と思ってる環境で育ったからこそその彼女だったわけで。まさにさっきの、中小企業はある程度男尊女卑で仕方ないんじゃないかってのは、親御さんから来てる可能性もちょっとある、と思うんですよ。もちろんそういう考え方は、伝統とか地域の歴史が関係してくるので、その人を責めるわけじゃないんですけど。でも、そういう考え方をどうしても一部の人は持ってるけど、これからはいかんよ、ていうふうに矯正していくのも、我々教育機関の、ダイバーシティ推進センターもそうですけど、重要な役割で、「違うよ」という啓蒙をしていくのが大切、って思うんです。

日本と欧米との違いは、
どこからくるのでしょうか。

19世紀末、20世紀初頭って、というより1950～60年代までなんですけど、男尊女卑の考え方って、むしろヨーロッパの方がひどかったんですよ。例えば、僕は脳の生理学分野なんですけど、イギリスの権威ある150年続いてる生理学雑誌でJournal of Physiologyってのがあって、そこに投稿する際は僕だと自分の名前をToshihide TABATAとするんですね。でも女性は、ファーストネームはイニシャルだけしか許されてなくて。男性の所有物である、っていうものすごい考え方が、1950～60年代のころにはまかり通ってたんですよ。何とか家の、イニシャルだけの存在っていう。それこそ紫式部の時代の考え方の「為時の娘」みたいな。

それが変わる一つのきっかけは戦争でしょうね。男性が戦争に行っちゃって女性の力が不可欠になったと。アメリカでは有名なことですが、女性野球リーグが出来てそれが大人気だったり。あとはやはりキリスト教が背景にあると思うんです。神が一番偉くて、その他の人たちはみんな平等。じゃあ男女関係ないんじゃないですか、ということに繋がるんだと思うんですよ。それが社会に現出した時に、すかさず大きな運動にして、woman revolution、女性革命っていうことに繋げて権利を獲得していった歴史がある、と思いますね。さらに、良いか悪いかは別ですけど、能力格差社会ですよ。すごい能力があってもめちゃくちゃ稼ぐ人と全然稼げない人が普通にいる社会なので、能力のある女性はどんどん能力を発揮して上へ上へ、って上昇志向。おしとやかにしていたら、ひどい生活が待っているという現実が分かっているから、男女共に競争で勝ち取ったっていう流れがあると思いますね。

教育機関として歪みを正し、啓蒙する

今後、どうしていくことが
必要なのでしょうか。

男尊女卑がなぜいけないかを伝えるのも確かに大事ですが、それより私が今感じているのは、男尊女卑を廃して**男女均等な機会を一生懸命に工夫している企業が、いかに良い方向に向かっているかということを見たり聞いたり体験する**機会が無いということです。そういうロールモデルを示してあげないといけないっていう思いが、今非常に強くなっていますね。男尊女卑はいけないと頭では分かっている、だけどその実態を改善していこうっていう様子であるとか、それによってメリットがすごくあるっていう体験だとか、そこで活躍している女性がキラキラしているだとか、そういうのを見る機会が無いのではないかとということがだんだんわかってきたんです。

それでまず考えているのは、本学のロボコンです！本学工学系の中でもロボコンに参加している女子ってのは非常に輝いていて、「女だてらに」という構えたところがある方もおられるかもしれないけど、そうでない方も「普通に興味があるから」って参加するようになってきたんですよ。さっきの旧帝大の話みたいに。全然**男子女子関係なく、コースも超えて活躍してる子たちがいるんだよ、さらに、この先就職しても活躍してて、男尊女卑もへったくれもなく、男女ともに育児休暇を取って100%復帰して輝いて活動してるけど？**っていうOB・OG達を見せることもこれから必要だと考えてるんです。



「女だてらにやってきた」、それはそれで結構なんですけど、その感じでずっと行くと疲れちゃうところもあると思ってるんですよ。そんな気負わなくてもいいんだよって伝えたい。普通に楽しそうにやってるじゃない、ってところを提示してあげるのが、高校生にとっても学内の学生にとっても重要じゃないかなあって思います。同級生にも「私もやっとならばよかった」「そういう世界があったんだ」ということになりますから、すごく良いんですよ。さらに卒業後も、世の中でバリバリ活躍してますっていう。うちの研究室は割と研究思考の学生が来て、各分野で世界トップの企業の開発をやってます。今年修士を卒業して就職した女性は、一人はスウェーデンの会社なんですけど、自動車の安全ベルトとかエアバッグとかで世界トップシェアのオートリルって会社があって、その開発を今やってる。筑波にある開発センターで働いています。もう一人は、半導体を製造する装置ってのが日本は十八番で数少ない残されたハイテクなんですけど、ニューフレアという会社の、横浜にある中央研究所に勤めていますね。また別の女性は岡山の倉敷にあるJFEスチールっていう、世界第2位の鉄鋼の会社で工場の自動化をやってます。世界トップレベルの会社でみんな開発研究っていう最先端をやってますので、まさに「バリバリやってます」というロールモデルですよ。

男女共同参画がもたらす良さを実体験することが大切なですね。

あと、企業のインターンシップにどんどん行ってもらうことが重要と考えていて。今、特にエンジニアリングや理系の開発職のような高度人材っていうのは、経産省と厚労省と文科省が認めて、インターンシップ自体を採用試験にしているんですよ。だからそういう高度な職を目指した場合、インターンシップは必須で行かないといけいない。行ったら、その企業の一員として仕事をして、まさにロールモデルがいっぱいいる中に突っ込まれますので、会社にもよるでしょうけど、男女共に活躍してる様を見て自然と「そういうふうになってるんだな」というのが分かる。男尊女卑なんてうちはそんなことしてませんので、っていう会社に行けば、現実にそんなものがとっぴらわれている世界を見てくる事が出来るので、やっぱり見聞が広がる。ジェンダー平等を進めてるホワイト企業っていうのを、政府もリストアップしてますから、そういうところにどんどん、選択必修みたいな感じで行ってくれってことも、した方がもしかしたらいいのかもしれないですね。

富山を良くして、日本全国のモデルに

旧弊な考えの分野は今、炙り出しが行われてるところなんですね。日本でももちろん、与謝野晶子とか平塚雷鳥とかそういう女性運動があったんですけど、その当時は異端で終わっちゃって。男性でなんとか回せちゃってたんですよ、社会が。戦後もそのまま何となく来ちゃって。高度成長期に猛烈に働く時代、工業が結構多くて、力仕事とか危険な仕事を女性にさせるわけにはいかない、っていう過剰な忖度というか、過剰な親切心があるって言われていて。そういうのは男性側で、簡単な事務仕事は女性に、でも簡単な仕事は給料安くなっちゃうっていう、循環があるんですね。

欧米行っちゃうともう、男女関係なく同じリスクは負ってもらうよという。もちろん母体保護はあるんですけど。今は幸いそういう仕事ばかりじゃなくて、母体保護にも問題ないような仕事も増えてきています。だから今こそ旧態依然としたありかたを打破する時で、「女性だから簡単な仕事」っていう配置をする必要が無く、企業も、利益を純粹に追及したら、出来ない男性より出来る女性を配置した方が儲かるじゃんっていう、単純な発想もできる。それはでも、**男女という枠で考えない社会になるであろう、と僕は思います**ね。

実はリクルート社さんとかとも同じようなことを話したんですけど、労働環境が良くないとどんどん人手不足になり、いわゆる有名な企業に人を取られて、富山の経済が立ち行かないってコンサルティングされてるんです。富山もそうですが地方の企業はですね、100%オーナー企業ばかりなんです。ある人ががんばって会社を作って、そういう会社がひとつポツンと出来たってのがたくさんあるんです。立派なことなんですけど。でも中央の有名な会社の系列企業だったら、例えば「男尊女卑はいかん」と中央から命令が飛ぶんですね。で全国一律にバツと変わるんですよ。それが100%オーナー企業には無い。で、変わりにくいっていうことなんです。

だから実は**富山は良い面も悪い面も日本の伝統を凝縮したような所で。ここを改善すると日本全国を変えられるっていう。だからこそ、ドラスチックな仕事になるから、僕はものすごくやりがいを感じてる**んですけど。この問題が密になっている場所を変えるっていうことは、もうそれは全国のノウハウを変えることになる、模範になるということですから。やってやろうか、という想いです。 （第1部 完）



田端 俊英

(たばたとしひで)

工学系 教授

(令和6年度)



大阪大学文学部入学、大阪大学人間科学部に転学部・卒業、大阪大学大学院医学研究科修士課程修了、大阪大学大学院医学研究科博士課程修了、University of California, Davisポスドク研究員、理化学研究所CREST研究員、金沢大学大学院医学研究科助手・研究科内講師、大阪大学大学院医学系研究科助手・助教、大阪大学医学部講師、東京大学大学院医学系研究科客員研究員、富山大学大学院理工学研究部（工学）准教授、富山大学大学院理工学研究部（工学）教授、現在に至る

専門分野は生理学、神経科学、バイオインフォマティックス

「知識と技能を普及させることは…国内あるいは多国間に横たわる不公平を減らす鍵である。（教育が格差社会を是正する。）」トマ・ピケティ著『二十一世紀の資本』より

「学生には専門バカではなく、時代が変わっても生き残っていける学際的なルネッサンスマン（万能の人）になってもらいたいと願っていますし、そのための支援を行っています。」

趣味：アウトドア、乱読、オーディオ、電子工作



Center for Diversity, Equity and Inclusion
University of Toyama

富山大学
ダイバーシティ推進センター